

日本残留中国人：札幌華僑社会を築いた人たち

S0, Shisai / 曾, 士才

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

2014-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010078>

日本残留中国人 －札幌華僑社会を築いた人たち－

Chinese who remained in Japan : People who established the overseas Chinese community in Sapporo

曾士才

SO Shisai

はじめに

終戦当時、日本に在住していた中国系の人びとには、早くから日本に生活の拠点を置いていたいわゆる老華僑や日本統治下の台湾から生活の基盤を日本に移していた台湾人だけでなく、中国大陆や台湾からの留学生、さらには華北からの強制連行者（中国では「強制劳工」という）がいた。その総数は少なくとも 8 万 5692 人である〔竹前・中村 1996：20-42〕。日本の敗戦を境にこれら中国系の人たちの「帰国」が始まった。

これら中国系の人たちの「帰国」の全体像については〔日本華僑華人研究会・陳 2004〕、〔王 2009〕によってかなり明らかになっている。王によると、6 万 5885 人が 1945 年から 48 年までの間に中国大陆や台湾に帰国した。さらに、中華人民共和国ができた 1949 年から 58 年までの間に、4 千～5 千人（うち台湾人約 3 千人）の中国系の人たちが中国大陆へ帰国している。しかし、実際には 1949 年以後も 2 万人から 4 万人程度の中国系の人たちが日本に滞在していた〔王 2009：203〕。

これら帰国しなかった、あるいは帰国を望まなかった中国人の多くはいわゆる老華僑やすでに日本に生活基盤を置く台湾人であったが、

本論で取り扱う札幌に在住した中国系の人たちは留学生や強制連行者が多かった点で、横浜、神戸、函館、長崎など歴史的にみて中国系の人たちが早くから居住していた他の地域と大きく異なっている。帰国に関しては、上述の〔日本華僑華人研究会・陳 2004〕、〔王 2009〕のほかにも、GHQによる占領期の外国人の取り扱いに関する記録〔竹前、中村 1996：20-42〕から GHQ の送還方針や数量的なデータを知ることができる。中国からは帰国した留学生・華僑の手記、回想、証言〔回国五十年編輯委員会 2003〕、強制連行者の帰国および遺骨送還に関する北京市、天津市、青島市など各地の档案馆の資料〔居之芬、庄建平 2003〕、戦後在外国民の送還に関する中華民国政府内諸機関の公電記録〔謝 2007〕や帰国促進のための中華人民共和国と日米両国との政府間交渉過程に関する論考〔王 2010〕もある。しかし、残留に関しては資料が限られており、特に留学生や強制連行者関係の資料はきわめて少ない¹。

本論では、第二次世界大戦後の札幌における中国系の人々の往来、定着の実態を探るとともに、札幌華僑社会の形成過程を明らかにする。具体的には、①札幌華僑総会 5 代目会長・席占明（在任期間 2002 年～11 年）の手記と口述に基づき、1949 年 10 月 10 日に札幌の留学生寮に集まった札幌在住の人たちのその後の消息を通して、帰国と定住の間で心が揺らいだであろう残留者の姿を垣間見るとともに、②自らは日本に留まり、生存した強制連行者の帰国と殉難者の遺骨の収集、送還に尽力してきた席氏らの姿を取り上げ、祖国と第二の故郷の架け橋になろうとした残留中国人の生き様を見て行きたい。

なお、本文中の人名については、新聞や図書などですでに活字になっている人、華僑総会会長などの公人や遺族の承諾を得た場合は実名で表記するが、それ以外は記号やイニシャルで表記している。

1 札幌における北大留学生

席占明によると、終戦当時、札幌には老華僑2世帯、留学生（台湾人含む）約20名、戦後解放された強制連行者が7世帯いたという。この節では終戦後も札幌に残留した留学生の属性や留学生としての身分を理解するために、戦前、戦中の北海道帝国大学における中国人留学生について述べたい。

許晨は北海道大学文書館所蔵の「農学校簿書」・「帝大簿書」・「農学部関係資料」など一次資料を分析して、札幌農学校時代（1876年～1907年）から東北帝国大学農科大学時代（1907年～18年）、旧制北海道帝国大学時代（1918年～50年）における留学生総数が477名であり、このうち中国から386名（うち満洲国71名、蒙疆聯盟自治政府29名）、台湾から10名であることを明らかにしている（分類枠は北大側のものに基づく）〔許2010：27〕。

1935年から36年にかけて入学・在学者数ともに戦前のピークを迎えたが、1937年に日中戦争が勃発すると、中華民国教育部が引揚命令を出したため、北大に在学する中華民国生36名のうち34名が帰国し、中国人留学生数が激減した。しかし、①日本軍占領地域における治安回復と地方政権（北京臨時政府や汪兆銘の南京政府）による留学生派遣支援、②中国の多数の大学が西南・西北の奥地に疎開するなか、公費による日本留学により価値があると考えられるようになったため、翌1938年には留学生数が回復している。太平洋戦争の末期になると、満洲国からの留学生は本国からの総引き揚げ命令にしたがい帰国したが、他の政権から派遣された留学生たちは引き続き日本に留まり、「集合教育」の名のもと、集団疎開した。そして終戦後は、中国で勃発した内戦のために帰国を見合わせ、留学生はおおむね日本での学業を続けることになった。中国からの新規派遣はなくなったが、戦前来日した留学生が復学したのである〔許晨2010：31-37、45-48〕。

ところで、中国人留学生はいかにして北海道帝国大学の学部を卒業できたのであろうか。旧制帝国大学に入学するには、中学校から高等学校に進学し、高等学校高等科（1894年から1919年までは大学予科の名称）を経て帝大に入学するというのが通常のコースであるが、留学生がこのようなコースで大学に入学することはあまり多くはなかった。このような通常のコースによって入学することが困難な外国人留学生に対し、日本人学生との競争を避け入学機会を提供するという主旨の文部省令第15号「外国人特別入学規程」が1901年（明治34）に施行されている。この規程は前年の1900年（明治33）に定められた「文部省直轄学校外国委託学生に関する規程」に基づいている。この1900年の「規程」の第一条には、「外国人が文部省直轄学校に『一般学則ノ規定ニ依ラス』して一科目ないし数科目の教授を受けようとする場合には外務省、在外公館ないし本邦所在外国公館の紹介がある場合これを許可することがある」と定められている〔永田2006：7〕。

北海道帝国大学の場合、大学院、学部のほかに予科、実科（農学、林学）、専門部（土木、水産）などの付設部門があり、留学生の身分として考えられるのは、大学においては正科生か選科生（正科生に欠員あるときに限り入学できる）、付設部門においては正科生か聴講生であるが、文部省令第15号によって特別入学した中国人留学生は付設部門の聴講生のみだった〔許晨2010：38〕。実科や専門部の聴講生として入学し、基準となる成績なら1年後に正科生となり、実科や専門部を卒業して大学の選科生となる。工学部や理学部に進む者もいたが、大多数は農学部に入った。農学部の選科生は通常は大学課程の一科目または数科目を選んで専修するが、中国人留学生の場合は全科目を履修し、正科生と同様に卒業試験を受け、論文を完成させる。そして、学部内で実施される学力検定試験（本来なら修了すべき高等学校高等科ないし大学予科の学力の有無を確認するため）に合格すると、大学本科生としての卒業が認められた。年代とともに制度が少しずつ

変更されているが、1932 年以降は上記の制度により、1950 年までに農学部に入學した 83 名のうち、67 名が選科生として入學し、農学士を取得している〔許晨 2010：37-43〕。なお、このような制度のもとで入學した留学生たちは、学部を卒業するためには、最短でも 6 年間の時間（実科・専門部 3 年、学部 3 年）を要することになる。終戦後に北大に復學した留学生たちはまさに学業途中の学生たちであった。

たとえば、席占明の場合、北大に入學してから 6 年半かけて卒業している。彼は日本軍支配下の山西省北端、万里の長城のふもとに近い陽高県で生まれた。父親は地方の小学校の教員で普段は家に不在、母親は農民で学校に通ったことがない。兄 1 人、妹 3 人の家族であった。山西省の大同中学を卒業後、1943 年 12 月に張家口にある蒙古高等学院（1 年制の寄宿学校）の一期生として卒業した。前身は留日予備学校で、モンゴル人学生が多かったが、同期には漢族 10 名、回族 1 名がいた。1944 年 2 月日本政府の官費で日本に留学することになった。一緒に 40 人が来日した。3 月に文部省の試験を受け、10 名が合格した。師範学校と農業学校の選択肢があったが、学業を終えて故郷の農業開発に従事したいと考えて農業を選んだ。また、北大農学部農学実科（3 年制）には中国人が多かったことも決め手になった。蒙古高等学院から一緒に来た同期のなかからは 4 名が入った（モンゴル人 2 名、漢族 2 名）。

1945 年戦況が悪化すると、留学生は「集合教育」の名の集団疎開をすることになった。学部生は京都に、大学付属の専門部などの学生は鳥取に集められた。一方、席占明のような蒙疆政府派遣の学生に対しては特に決まりはなかったが、北大で留学生を世話する日本人教員の意向で盛岡高等農林学校への編入となった。戦局の悪化により本州との行き来が途絶える前に本州に疎開させようという配慮があったという。戦後は盛岡市内の料理屋（元の陸軍将校クラブ）が宿舎にあてがわれたが、帰国するすべもなく、翌 1946 年 2 月か 3 月に札幌に戻り、

復学した。1947年3月北海道大学農林専門部農学科（農学実科が46年から改称したもの）を卒業し、農学部農学科選科生となった。学力検定試験を受験せずに進学したので、1950年の春に検定試験を受け、その年の9月に農学士の学位を取得している。

2 戦後の札幌中国人社会

終戦後から翌1946年春ごろにかけ札幌に戻ってきた北大の中国人留学生たちは、北十条西一丁目の下宿屋を借り上げて留学生寮・中華学寮とした。また、この年に彼らは中国留日学生北海道同学会を組織した。メンバーは当初17、18名で、大陸出身者ばかりであった。会を組織した最大の目的は、それまで大東亜省から支給されていた学費補助金がなくなるので、連合国民としての食糧の特別配給を受けられるように道庁や札幌市役所に交渉するための体制作りにあった。実際、配給された食糧や酒、タバコを売って糊口をしのいだという。

席占明は1枚の写真を保存していた（写真参照）。これは1949年10月10日に北海道同学会が中心となり、札幌市内に住む留学生、華僑の家族など全員（50数名）が一堂に会し、中華学寮で雙十節（中華民国の建国記念日）の祝賀会を催した際に、近所の写真館に頼んで撮影したものだという。氏によると、中華民国の国旗「青天白日旗」を掲げ、学寮の壁には「雙十節」と書かれた紙を貼り、表向きは雙十節の祝賀会だが、実際には中華人民共和国の誕生を祝賀する気持ちだったという。そして、札幌在住の中国人が一堂に会するのはこれが初めてだった。

写真には44名が写っており、席氏は男性1名を除く全員を覚えていた。また、北海道同学会の会誌『国境線』や席氏の記憶から、ここには写っていないが、札幌に居住していたことが分かっている北大留学生7名、残留した強制連行者1名の氏名も覚えていた。これにより、

1949 年当時、札幌に在住していた中国人およびその配偶者からなる中国人社会は 52 名いたことになる。

表 1 は、子ども 8 名を除く写真に写っている 36 名の大人と写真に写っていない 8 名について、その属性とその後の消息（帰国か残留かなど）を整理したものである。写真に写っている人は記号で表している。前列、中列、後列をⅠ、Ⅱ、Ⅲとし、同じ列では左から順に 1、2、3 のように数え、たとえば、中列左から 15 番目の人はⅡ -15 と表記している。また、写真に写っていない人は LHJ のように直にイニシャルで表記している。また、表 2 は人物ごとの個別情報を記したものである。

まず留学生については、大半の学生は実科や専門部を卒業して大学の選科生となっており、合計で 6 年間は学業に従事している。なかには学業を終えてから 5 年間も札幌に留まっていた人もいるが(Ⅲ - 9)、多くは卒業後すぐか 2、3 年後には帰国している。留学生 23 名のうち帰国したのは 17 名である（うちⅡ -3、Ⅱ -13 の 2 名はのちに日本に再入国している）。だが、〔日本華僑華人研究会・陳 2004〕によると、留学生の帰国は 3 つの時期に分けることができる。第 1 段階（1950 年～ 52 年）では、留学生が個別に帰国した時期で、国交のない大陸中国に入るために、まずは香港に向かうなどの苦労があったという。この時期に帰国したのは日本全国で 200 人から 300 人くらいである。北大の 17 名については、この時期に帰国した者はいないと席氏は断言している。やがて、中国大陸からの集団引揚げ者から大陸情報や経験談が入るようになり、祖国からの帰国の呼びかけや華僑団体・留学生団体の呼びかけもあり、留学生や華僑学生の間で帰国ブームが起った。

1952 年 12 月東京華僑総会など中国関連団体が日本政府、引揚三団体（日本赤十字社、日中友好協会、日本平和連絡会）、人民政府に留日学生・華僑学生の帰国および中国人捕虜の遺骨送還を求めた。そし

て、交渉の結果、中国からの引揚船を利用して往航に帰国希望者および遺骨を乗せることになった。1953年6月27日、舞鶴港から出港した第4次引揚船に551名の留学生・華僑学生が乗船し、天津に向かった。これが第1次帰国船である。17名のなかで最も早期の帰国者であるⅡ-2とその妻Ⅰ-1、Ⅲ-5、Ⅲ-6はこの船に乗船して帰国したと思われる。帰国ブームの第2段階（1953年～55年）には3,178名が帰国している。その後、事前に聞いていたのと異なり、中国での生活は苦しいことが伝わるにつれて、帰国ブームは下火になった。それでも第3段階（1956年～58年）には630名が帰国している〔日本華僑華人研究会・陳2004：112-114〕。17名の中の残りの学生たちが具体的に何年に帰国したかは定かでないが、1953年から58年までの間に帰国したと考えられる。

一方、残留した留学生や強制連行者はなぜ残留したのか、残留せざるを得なかったのだろうか。留学生については、日本の占領地からの留学であり、親日政権の派遣留学だったことによる心理的なストッパーが働いたことも考えられるが、より重要なのは日本人と結婚したことや残留することが中国人としての使命であると覚悟したことが挙げられる（第4節参照）。強制連行者については、捕虜虐待などを問うBC級戦犯の裁判の証人となるために日本に留まることを要請され、そのうちに日本人の伴侶を得て残留するようになったケースもあるが、郷里とのつながりを失ってしまった人も少なくなかったようである（第3節参照）。いずれにしても、残留したこれらの留学生や強制連行者が札幌華僑総会をけん引していったことは特筆すべきことである。



雙十節の祝賀会。1949年10月10日中華学寮にて。

属性 消息	留学生				強制連行者	老華僑	その他	合計
	中華 13 名	満洲 1 名	蒙古 4 名	台湾 5 名				
中国に 帰国	Ⅱ -2、Ⅲ -2、Ⅲ -5、Ⅲ -6、Ⅲ -9、 ZQZ、LHJ、PJ、計 8 名	Ⅲ -12	Ⅱ -1	Ⅱ -4、Ⅲ -1、 ZSD、LCS、 WGSZ 計 5 名			Ⅰ -3	16 名
日本に 再入国	Ⅱ -3、Ⅱ -13						Ⅰ -1、Ⅰ -8、Ⅲ -11	5 名
日本に残留 (札幌)	QXL		Ⅱ -15、 Ⅲ -7		Ⅱ -9、Ⅱ -10、 Ⅱ -14、Ⅲ -10、ZLR 計 5 名	Ⅱ -7	Ⅰ -2、Ⅰ -4、Ⅰ -7、Ⅱ -5 計 4 名	13 名
日本残留 (他地)	Ⅱ -6、Ⅱ -8		Ⅲ -8		Ⅱ -16	Ⅱ -11		5 名
不詳					Ⅱ -12		Ⅰ -5、Ⅰ -6、Ⅲ -3、Ⅲ -4 計 4 名	5 名

表1 1949 年当時札幌在住 44 名の去就一覧表

表 2 1949 年当時札幌在住 44 名の個別情報

表 2.1 から表 2.3 までについて、Ⅰは写真 1 の前列、Ⅱは二列目、Ⅲは三列目を表し、1、2、3 はそれぞれの列の左端からの順番を表す。氏名は一部を除いてすべてイニシャル化しているが、氏名不詳や一部不詳は「 α α 」や「 α 」で表した。属性とは「留学生」、「強制連行者」(△印)、戦前から居住する「老華僑」(▲印)、「その他」(◆) のことであり、留学生については、さらに「中華」(○印)、「満洲」(◎印)、「蒙古」(㊦)「台湾」(㊩印) に分類した。また、2011 年末現在において、□は存命、■は他界、? は不詳であることを表す。

表 2.4 は写真に写っていない 8 名の個別情報であり、表記は上記に準じた。

2.1

Ⅰ -1 SN ◆ (Ⅱ -2 の妻、日本人) ■

1950 年ごろ東京から興安丸で家族と中国へ渡ったが、中国語も話せず、生活にもなじめなかったため、しばらくして離婚し、娘、息子を連れて札幌に戻った。華僑総会内にあった貿易会社の事務員の経験あり。

Ⅰ -2 S α ◆ (Ⅲ -7 の先妻、日本人) □

離婚後も札幌在住。娘は横浜在住。

Ⅰ -3 N α ◆ (Ⅲ -9 の妻、日本人) □

実家は札幌。天津在住。

Ⅰ -4 HS ◆ (Ⅱ -7 の妻、日本人) □

札幌在住。

Ⅰ -5 α α ◆ (Ⅲ -10 の先妻、日本人) ?

Ⅰ -6 α α ◆ (Ⅱ -9 の妻、日本人) ?

夫の自殺後に札幌を離れる。

Ⅰ -7 武和貞 ◆ (Ⅱ -10 の妻、日本人) ■

札幌在住。結婚時に帰化したため、中国名を使用。2011 年他界。

Ⅰ -8 α α ◆ (Ⅱ -3 の妻、日本人) □

文革により日本に帰国。札幌在住。娘も札幌在住。

1949 年当時札幌在住 44 名の個別情報

2.2

II -1 BZE ㊦ (蒙疆政府派遣) □ 察哈爾省明安旗出身。モンゴル族
1947 年農学部付属農学実科卒業、1950 年北大農学部林学卒。北海道同学会（北
同）会員。天津在住

II -2 WWP ○ (北京政府派遣) □ 北京市出身。
1947 年北大土木専門部卒、1950 年北大農学部農業経済学卒。北同会員。
北京在住。貿易大学教授。他の留学生よりも早く帰国した。1953 年興安丸で日
本人妻、娘と一緒に帰国した。

II -3 ZGX ○ (北京政府派遣) □ 河北省順義県出身。
1948 年北大土木専門部卒、北大工学部電気科在籍。北同会員。
帰国後、北京郵電学院勤務。文革時批判され、妻とともに札幌に戻る。帰化し
て家電販売店を営む。娘は日本人と結婚し、札幌在住。

II -4 ZZW ㊦ ? 台湾省出身。
1950 年北大農学部付属水産卒。卒業と同時に台湾に帰国した。

II -5 LXX ◆ (樺太からの引揚者) ■
樺太からの引揚は雲仙丸などを使い、1946 年～ 49 年の間に計 5 回実施された
ているが、いつ引き揚げてきたのかは不詳。市内で最初は屋台を開き、のちに
食堂を営む。病死し、華僑総会で葬儀を営む際、息子が出現し、遺骨を持って行っ
た。

II -6 LXZ ○ (南京政府派遣) ■ 広東東莞県出身。
1951 年北大農学部獣医科卒業。北同会員。
日本女性と結婚。のちに帰化し、東京に移住した。2008 年か 09 年に他界。

II -7 廬社鉄 ▲ ■ 広東省出身。
戦前から札幌に居住。戦前は三越百貨店内の料理店でコック。戦後はすすきの
で中華料理店経営。民間金融会社も経営。札幌華僑総会 1 代目会長。1988 年に
他界。

II -8 WFY ○ (南京政府派遣) ■ 山東省出身。
中学校から日本に留学。1947 年北大土木専門部卒、1950 年北大工学部土木科卒。
北同会員。
1964 ～ 96 年、武蔵野工業大学専任教員。2008 年頃他界

II -9 CXS △ (連行先は大阪?) ■ 出身地不詳
戦後、大阪の病院に入院。1948 年～ 50 年ごろ東京から札幌に移住してきた。
札幌市内で中華食堂を開店していたが、1 年も続かなかった。日本人と結婚し
たが、51 年に自殺した。妻のその後の消息は不詳。

Ⅱ -10 武桂生 △（連行先は長野県） ■ 河北省南皮県出身。

1940 年に八路軍に少年兵として参加。44 年 6 月に日本に強制連行され、長野県で労役に服していた。戦後、東京の中国国民党代表団の衛兵として残留した。東京の中華料理店で働いていた日本人女性との間に男の子ができ、札幌にいる劉智渠（Ⅲ -10。同じく強制連行者）を頼って移住してきた。中華料理店、不動産業（貸店舗）を営んでいた。1991 年他界。

Ⅱ -11 ZLW ▲ ■ 山東省出身。

戦前から札幌に居住。日本料理店で板前。戦後は中華料理店営む。数年後、小樽へ。妻も中国人。

Ⅱ -12 JSF △（連行先不詳） ? 出身地不詳。

1948 年～ 50 年ごろ Ⅱ -9 の CXS と一緒に東京から札幌に移住してきた。市内で中華食堂を経営していたが、1 年も続かず、消えてしまった。

Ⅱ -13 WZX ○（南京政府派遣） ? 湖北省漢口市出身。

1947 年北大土木専門部卒、1950 年北大法文学部法律学科卒。北同会員。文革後、日本人妻と札幌に戻る。住所、職業不明。

Ⅱ -14 LSS △（連行先は秋田県花岡） ■ 河北省河間県出身。

花岡関係の BC 級裁判の証人として残ったのち、1946 年 8 月来日した中国国民党代表団の衛兵となった。その年の末に北海道にやってきた。最初は劉智渠（Ⅲ -10。強制連行者）と行動をとともにしていた。その後、中華料理店やクラブを経営したが、事業に失敗したことや鹿島建設からの補償も期待できず、悲観の余り、1973 年に自殺した。

Ⅱ -15 席占明 ○（蒙疆政府派遣） □ 山西省陽高県出身。

1947 年北大農学実科卒業、1950 年北大農学部農学科卒。北同会員。札幌中華書店店主。札幌華僑総会 5 代目会長。

Ⅱ -16 LJH △（連行先は北海道豊里炭鉱） ■ 山東益都出身。

郷里から連行され青島で船に乗せられて北海道の川口組豊里炭鉱で働かされた。虐待に耐えられず 45 年 8 月に逃亡し、山中に 3 年間潜んでいたが、発見され札幌の警察署に移送された。日本人妻との間に女子がいたが、札幌になじめず、余市で食堂。1972 年病気のため他界。

2.3

Ⅲ -1 XKS ㊦ ? 台湾省出身。

1947 年北大理学部植物卒業。上海の研究部門に勤務。

Ⅲ -2 TYK ○ (北京政府派遣) ? 河北省安平県出身。

1948 年北大土木専門部卒、1951 年北大工学部建築科卒。北同会員。

石家荘の役所勤務。

Ⅲ -3 α α α ◆ ? 台湾省出身。

終戦後本州から移住した台湾人。写真撮影後、暫く経ってから姿を消した。

Ⅲ -4 CSS ◆ ? 台湾省出身。

妻は日本人。札幌で飲食店を経営。写真撮影後、暫く経ってから姿消した。

Ⅲ -5 WXG ○ (北京政府派遣) ? 山東省海陽県出身。

1951 年北大農学部獣医科卒。北同会員。

終戦後、鳥取から札幌に移住した。日本人の妻と一緒に興安丸で中国へ帰国した。帰国後どうしているかは不詳。後に妻は日本に戻り、札幌に在住。

Ⅲ -6 LZG ○ (南京政府派遣) ■ 上海市出身。

1951 年北大農学部農業経済学卒。北同会員。

鳥取から札幌に移住。興安丸で中国に帰国。2011 年他界。

Ⅲ -7 李学士 ○ (蒙疆政府派遣) ■ 綏遠省托県出身。

1947 年北大農学部付属農学実科卒、1950 年北大農学部農学科卒。北同会員。

日本人と結婚 (Ⅰ -2FS)。貿易商社を経営。札幌華僑総会 3 代目会長。2004 年他界。再々婚相手の日本人妻が札幌在住。

Ⅲ -8 TF ○ (蒙疆政府派遣) ■ 綏遠省薩県出身。

1951 年北大農学部農学科卒。北同会員。

横浜の華僑学校の教員になった。2002 年に他界。妻は横浜の老華僑で同じく華僑学校の教員だった。娘 2 人は横浜に在住。Ⅱ -15 の一期下。06 年か 07 年に他界。

Ⅲ -9 LZX ○ (北京政府派遣) ? 河北省唐山市出身。

1948 年北大農学部林科卒。北同会員。天津市政府の農林部門に勤務。

Ⅲ -10 劉智渠 △ (連行先は秋田県花岡) ■ 河北省県薊県出身。

25 歳で連行され、花岡中山寮に収容され労役に服した。花岡関係の BC 級裁判の証人として残った。札幌華僑総会 2 代目会長。後妻の日本人は札幌在住。

Ⅲ -11 LZZ ◆ (中国からの「引揚げ」) ■ 上海出身か。

日本人として上海から「引き揚げ」てきた。独身。1985 年 1 月他界。

Ⅲ -12 WBQ ◎ ? 遼寧省瀋陽県出身。

1944 年に留学。45 年に帰国するが、WWX と名前を変えて再来日。

1952 年北大農学部農化科卒。北同会員。Ⅱ -15 と同じクラス。後に帰国し、遼寧省瀋陽の農業試験所勤務。

2.4

ZSD	㊦	台湾省新竹県出身。	農学部農学科中退。卒業せず帰国。
ZQZ	○	広東省中山県出身。	農学部獣医科卒。1951 年卒業して帰国。
LCS	㊦	台湾省台中県出身。	農学部獣医科卒。1953 年卒業して帰国。
WGZ	㊦	台湾省新竹県出身。	文学部哲学科卒。1953 年卒業して帰国。
QXL	○	山西省安邑県出身。	農学部農学科卒。1953 年卒業して札幌残留。 札幌華僑総会 4 代目会長・曲学礼のこと。
LHJ	○	広東省東莞県出身。	教養学科中退。卒業せずに帰国。
PJ	○	天津市出身。	土木専門部を卒業し、工学部電気科入学。 卒業せずに帰国。
ZLR	△	山東省益都出身。	北海道豊里炭鉱で労働。1986 年札幌で他界。 第 3 節、4 節で述べる張来栄のこと。

3 日本に残留した強制連行者のその後

1942 年 11 月 27 日、東条内閣は日本国内の労働力不足を補うため、閣議決定により華人労務者移入の方針を決定し、1943 年に試験的に 1,420 名を移入した。そして 1944 年に入ると、本格的移入を開始した。その年の 11 月までに 8 集団、1,411 名を移入し、45 年 3 月～5 月には 161 集団、37,524 名を移入した。総計 169 集団 38,935 名が日本全国 135 の事業所に配置され、鉱業、港湾、荷役業、造船業、土木建築業などに就労させられた。形式上は華北勞工協會が斡旋した形をとったが、実際には強制連行であった。強制連行者の配置期間は平均 13.3 ヶ月、最長の人で 28.4 ヶ月、最短の人で 1.3 ヶ月であったが、死亡者が 6,830 名にものぼり、移入総数 38,935 名の 17.5%にあたる。いかに人間扱いされなかったかがわかる数字である〔日本華僑華人研究会・陳 2004：336-337、日本中国友好協会北海道支部連合会 1989：8〕。

外務省調査報告書『華人労務者就労事情調査報告』（外務省管理局、昭和 21 年 3 月 1 日）によると、生存者の帰国は、連合軍総司令部の命令により、1945 年 12 月末日までに 30,737 人、1946 年 2 月末日までに 31,917 人が帰国し、一部残留した者、行方不明者を除いて基本的に終了したことになる〔日本華僑華人研究会・陳 2004：334-336〕。

北海道では、道内の 58 事業場に 20,430 名が配置され（実数は 16,282 名だが、事業場間の移動があった）、死亡者数は 3,047 名であった。北海道の強制連行者数は全国の 41.8%で、死亡者数は全国の 45%にのぼった。中国人の強制連行において北海道が特別大きな意味を持っていることがわかる〔日本中国友好協会北海道支部連合会 1989：12-17〕。1945 年年末近くになって、13,000 余名の生存者は北海道各地から函館に集合し、連絡船で本州に送られ、連合軍の手配により主に佐世保港から中国の天津郊外の塘沽に送還された。しかし、

何らかの理由で道内には 10 数名が残留し、そのまま居住した。また、本州から移入してきた強制連行者もいた。彼らは援護と補償のないまま、仲間どうしで肩を寄せ合い、あるいは自力で生存し続けた。故郷の土を一度も踏むことなく異郷で亡くなった人も多かった。

残念ながら北海道では強制連行者の生存者はもういないため、ご本人から話を聞くことができなくなっている。北海道在住の強制連行者で唯一の生存者だった ZGS 氏（1909 年 8 月生、河南省商丘出身）は 2002 年 1 月 18 日に他界している。ZGS 氏は 1944 年に強制連行され北海道野村鋳業置戸鋳業所（水銀鋳）で働いていた。送還時函館で船に乗り遅れたため残留したが、その後日本人女性と家庭を持ち、北見市で飲食店を営んだ。1992 年に妻が他界し、子どもたちが後を継いでいる。

このように当事者だけでなく、配偶者もすでに他界しているか、高齢となっている。また、自殺など不幸な最期を遂げている方も少なく、関係者と連絡をとり、話を聞くことがはばかれるケースもあった。席占明の手記〔席 2000〕と記憶によると、北海道に連行され、そのまま北海道に残留した人は 10 人、本州に強制連行されたが、戦後札幌に移入してきた人は 6 人いた。本稿では紙面の関係でその一部だけを紹介する。

1 北海道に連行され、そのまま北海道に残留した人たち

上述の ZGS 氏以外にも 7 名について席氏は記憶していた。ここではその一部を紹介する。

張来栄（1914 年生、山東益都出身。1986 年 12 月 11 日他界、享年 72 歳）

郷里から連行され青島で乗船し日本に来た。北海道の空知群赤平にある昭和電工豊里鋳業所で働かされた。川口組が雇用主となり、坑道掘進や石炭採掘に従事した。過酷な環境と虐待に耐えられず 1945 年

8月に逃亡し、山中に3年間潜んでいた。留萌管内の村の食糧配給所から食糧を盗もうとしたところを発見され、札幌の警察署に移送された。

席氏らが警察署から引き取り、函館から全日本華僑聯合総会北海道分会（1951年留日北海道華僑総会と改称）の張仁忠副会長が来て函館に連れて行った。華僑の経営する飲食店で下働きをしながら帰国の機会を待っていたが、うまくいかず札幌に戻った。市内の華僑が経営する食堂でコックをした。その後、日本人女性と結婚し、2男1女に恵まれ、後日自分で食堂を経営した。しかし、過労のため心臓病を患い、1986年12月11日、出前から店に戻ったところで倒れ他界した。

LJH（1914年生、山東益都出身。1972年12月他界、享年58歳。写真のⅡ-16）

上記の張来栄氏と同じようにして連行された。張来栄氏と一緒に脱走し、行動を共にした。函館から戻ってから、転々と店を替えた。日本人女性との間に女の子をもうけたが、札幌になじめず、道内の余市黒川町で店を構えた。肺がんを患い、1972年12月他界した。死後札幌にある教会で葬儀を行ったが、遺骨は華僑公墓に埋葬することなく遺族が処理した。家族とはその後連絡がとれなくなった。

2 本州に強制連行されたが、戦後札幌に移入してきた人たち
劉智渠（1920年5月生、河北省県薊県出身。99年2月他界、享年79歳。写真のⅢ-10）

25歳で連行され、花岡中山寮に収容され労役に服した²。花岡関係のBC級裁判の証人として残った。札幌市内で小さな食堂を開いた。その後、小樽から来た中国人（北海道への強制連行者で、事業場では通訳役を務めていた）と一緒にラーメン屋を始めた。経営は順調だったが、パチンコ屋に業種変更した。商才に優れ、さらに何軒かの居酒屋

屋、中華料理店を開業した。後妻の日本人女性との間に3男1女を設けた。息子たちはみな大学を卒業し、家業を継いでいる。札幌華僑総会の第2代会長として、花岡事件の生き証人として活躍した。生前、札幌近郊に墓地を購入しており、そこに埋葬されている。家族はみな帰化している。中国には三度里帰りしている。

LSS（1917年生、河北省河間県出身。1973年9月他界、享年56歳。写真のⅡ-14）

花岡関係のBC級裁判の証人として残ったのち、1946年8月来日した中国国民党代表団の衛兵となった。10月ごろ衛兵の職を辞して、中国人のいないところと思って、その年の末に東京から北海道にやってきた。1947年、札幌市内の豊平で食堂を営む朝鮮人からピストルを譲り受けたことを密告され逮捕された。留置場にいたところを席氏に発見され、談判の結果、釈放された。後日、その食堂を席氏が訪ねると、同じく花岡の生き残りである劉智渠もそこにいた。

最初は劉智渠と一緒にだったが、後に日本人と一緒に古着屋を営む。その後、独立して中華料理店A、Bを経営した。日本人の妻との間に息子が生まれた。その後離婚し、1934年にやはり日本人女性と再婚し、娘2人が生まれている。中華料理店やクラブの経営に行き詰まって手放し、自らが厨房に立って小さな中華料理店を営んだが、これも経営が芳しくなく、鹿島建設の補償を期待していたが、望みかなわず、悲観の余り、1973年9月店でガス自殺を遂げた。

生前、外国人登録証不携帯で起訴されたことがある。店から自宅に戻る途中、顔見知りの外事警察に捕まった。元来事件になるようなことではなかったが、当時は日中国交正常化前であり、何かその警察官に睨まれていたのかもしれないと席氏は推測している。華僑総会の協力で携帯違反に対する取り扱いに対する不服から、日本政府と戦った。死後、その遺骨はばらと霊園内の華僑公墓に納められた。本人は強制

連行後一度も祖国の土を踏むことがなかった。

LZP（1920年生、出身地不詳。1995年8月他界、享年75歳）

花岡事件の生存者。花岡関係のBC級戦犯の軍事裁判の証人として日本に残った。後に東京にあった中国国民党代表団の衛兵として留用された。そこをやめて横浜でパチンコ店を開いたが失敗し、1957年、劉智渠を頼って横浜から妻と娘とともに札幌に移住してきた。劉智渠のところにしばらく居候していたが、後に札幌で中華料理店を開く。日本人を誘って上海で花卉栽培の合弁会社を設立したこともあるが、大きな負債を抱えたまま廃業した。鹿島建設に補償金1千万円を要求していたが、実現することなく、1995年8月病気で他界した。遺骨は華僑公墓に埋葬されている。日本人女性との間に娘がいる。

CXS（生年、出身地不詳。1951年他界。写真のⅡ-9）

連行先は大阪らしい。戦後、大阪の病院に入院。1948年～50年ごろ東京から札幌に移住してきた。札幌市内で中華食堂を開店していたが、1年も続かなかった。日本人と結婚したが、1951年に部屋の押し入れで首をつり自殺した。妻のその後の消息は不詳。

JSF（生年、出身地不詳。写真のⅡ-12）

連行先は不詳。1948年～50年ごろⅡ-9のCXSと一緒に東京から札幌に移住してきた。市内で中華食堂を経営していたが、1年も続かず、消えてしまった。

武桂生 WGS（1922年生、河北省南皮県出身。1991年12月12日他界、享年69歳。写真のⅡ-10）

1940年に通信員として八路軍に入隊した。1944年山東省で日本軍の捕虜となり、日本本土に連行され、長野の炭鉱で働かされていた。

その後秋田の刑務所に送られた。釈放後は東京の麻布にあった国民党代表団の衛兵となった。その頃、渋谷駅前の中華料理店に出入りするようになり、その店で働いていた日本人の長谷川和子さんと知り合い、1946年秋に結婚した。和子さんは武和貞と名のるようになった。和子さんは東京生まれだが、戦争中に東京都が組織した開拓団に家族が応募し、和子さんを除く家族は北海道の当別に移住していた。また、復員した弟も北海道当別の炭鉱で働いていた。

1947年秋、桂生に中華民国から帰国命令が出たが、帰国したくない桂生は同郷の中国人の家にかくまわれた。出産のために北海道の親もとにいた和貞は急きょ上京したが、東京に着いた日に産気づき、出産した子ともどもこの同郷の中国人のもとに身を寄せた。そしてこの人の紹介で、一家は札幌の劉智渠を頼って札幌に逃げた。札幌ではラーメン屋で働きだしたのを皮切りに、独立してラーメンの屋台、店舗、中華料理店などを営んだが、すすきのの大火で店を失ってしまった。1953年に開店した串カツ店「串たけ」が繁盛して、妻・和貞が人一倍働き者で、コツコツと事業の基礎を築き、1963年には新築ビルを建て、貸店舗業にも手を広げ急成長した。「桂和商事」（桂生と和貞のそれぞれ一字を取って命名した）を立ち上げ、繁華街で何軒も貸店舗のビルを建てた。一人息子もやり手で、事業を拡大していった。

里帰りを二度したことがあるが、すでに両親はなくなっており、1983年7月に札幌のばらと霊園に立派な墓を建てた。墓誌に中国で他界した父親と姉の名前も刻まれている。1988年12月、息子・秀夫が家族を連れ、中国旅行の帰りに香港で急死した。それ以降、桂生は元気をなくし、華僑総会からも脱退し、帰化した。家業は孫が継いでいる。妻・和貞は2011年に他界した。

武桂生については、席氏の記憶だけでなく、事業を引き継いでいる孫の武賢樹氏から話を聞くことができ、また、2006年刊行の社史『桂和六十年史 1947（昭和22）→2006（平成18）』に掲載されている妻・

和貞(2011年12月他界)の口述記録や彼を助けた同郷の中国人の息子・侯景華氏の口述記録を参照した。

武桂生が日本に残留した理由については、和貞との出会いが大きな理由だが、実は彼は出征前に結婚し、子どもが生まれていたことを後に知ることになるが、その時にはすでに和貞と出会い、結ばれていたため、悩んだ末に和貞と日本で暮らすことを選んだ。桂生は生前、「自分はお金がなかったから読み書きも習えなかった。自分には目と耳と口しかない。だから必死に日本語を見て、聞いて、使って覚えた」と言っていたという。和貞も自分を選んでくれた桂生を男にするために尽くした。

しかし、故郷への思いは強く、二度帰郷している。一度目は日中国交正常化前に広州交易会に参加する際に帰郷している。また、1977年ごろには億単位のお金を使って地元南皮県に中学校を建設している。

息子の秀夫が急死したときは、悲しみのあまり1年間は死人同然で、もぬけの殻の状態だったという。しかし、残された孫たちに円滑に財産を相続させ、事業を継承させることを考え、自分が帰化することを思い立ち、90年には帰化している。中国を愛する気持はずっと変わらなかったが、このころから華僑総会から離れていったという。

4 残留中国人と札幌華僑総会の活動

終戦後の物不足のなか、日本人だけでなく中国人も窮乏生活を強いられていた。1946年には、留学生たちは中国留日学生北海道同学会を組織し、道庁や札幌市役所に交渉し、連合国民としての特別配給を一部受けられるようになった。しかし、札幌の中国人社会全体としては、依然として函館に依存していた。

1946年に函館において全日本華僑聯合総会北海道分会(1951年に

留日北海道華僑総会に改称)が北海道華僑全体の組織として設立され、北海道各地の華僑に砂糖、食用油、衣料などの特配物資を分配していた。札幌の中国人たちはたいへんな労力と時間をかけて特配物資を函館まで受け取りに行かねばならなかった。そこで 1949 年ごろになると、北海道財務局から直接特配を受領できるようにするため、北海道分会から離脱し、独自に札幌地区華僑自治会の看板を掲げた。しかし、食糧事情も徐々によくなり、配給に頼らなくてもよくなっていった。

1949 年 11 月末から 12 月初にかけて東京華僑総会の人たちが秋田県の花岡鉦山で行った中国人の遺骨調査・発掘が契機となり、全国で調査・発掘が始まった。一方、1953 年、在中国日本人居留民の引揚について、中国政府が引揚三団体（日本赤十字社、日本中国友好協会、日本平和連絡会）に代表を北京に派遣するよう呼びかけた。引揚三団体は北京に赴くに先立って、日本政府に対し、花岡事件により死亡した中国人の遺骨 4 百柱を中国に送還したいと要望したが、政府側からは「適当な時期に好意的な配慮を払う必要があるが、代表団の任務には関係ない」旨の消極的な回答があった。そこで、引揚三団体や東京華僑総会、中国留日同学総会を含む 14 団体は 1953 年 3 月に中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会を結成し、中国人俘虜殉難者を慰霊し、その遺骨を、中国に送還する事業を民間で進めることになった。こうしたなか、1953 年 9 月 1 日には、札幌地区華僑自治会は名称変更し、札幌華僑総会と名づけるようになった。これは東京華僑総会から陳焜旺副会長が来て、北海道の中国人殉難者の遺骨収集送還事業について提案があり、会として取り組むことになったが、対外折衝するうえで自治会の名称は適切でないということになり、名称を変更した。初代会長は老華僑の廬社鉄（広東）、副会長は陳清祥（台湾）、事務局は席占明（山西）であった。

1954 年には劉智渠が 2 代目会長となった。劉智渠は 1953 年にあった BC 級戦犯の裁判に花岡事件の生き証人として出廷したほか、日本

に残留した強制連行者で北海道にやってきた者（Ⅱ -10 武桂生、Ⅱ -14、LZP など）の面倒もよく見た。生前の劉智渠を知る古名幸子（3代目総会会長・李学士の妻）によると、劉は人と争うことを好まない、温和な性格で、同胞の面倒をよく見たという。この頃の華僑総会の活動は、年1回の通常総会に加え、国慶節の祝賀会。夏の海水浴、冬のスキーがあり、市内華僑の結婚や葬儀も総会で行った。対外的には、日本の友好団体との交流、税務署、警察、入国管理局など官庁との折衝、中国からの訪日代表団の出迎えなども行った。華僑の納税申請のために華商組合も設立した。

1966年には国内で文化大革命が起こり、1967年には東京で善隣会館事件が起こっていた³。劉智渠は自分が学校を出ていないのでメディアへの十分な対応に支障をきたすとして、北大出身の李学士に代わるよう要請したため、1967年から李学士が3代目会長となった。

1972年には南五条西八丁目にあった古い旅館を買い取り、ここを華僑総会の事務所・華僑会館にした。それまではビルを間借りして、何度も移転を繰り返してきたが、華僑総会にとって初めての自前の建物であった。1977年には曲学礼が4代目会長となり、1991年になると、商業地域にあったそれまでの会館の土地と住宅地にある土地（南十二条西八丁目）を交換し、鉄筋3階建ての華僑会館を新築した。曲学礼が他界したため、1年後の2002年からは席占明が5代目会長に就任した。

以上、札幌華僑総会が成立してから自分たちの共有財産である華僑会館の完成までの流れを整理した。戦後の札幌中国人社会において、札幌華僑総会は経帯的役割を果たすとともに、戦後日本政府が置き去りにしてきた殉難者の遺骨の収集、送還、慰霊問題や残留した強制連行者の支援において、大きな役割を果たしたといえる。以下そうした支援活動の一端を紹介したい。

1) 遺骨の収集、送還、慰霊

北海道の強制連行者数は全国の41.8%で、死亡者数は全国の45%に達しており、中国人の強制連行において北海道が特別大きな意味を持っている。1953年3月東京で中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会が結成されると、北海道でも同年6月に北海道中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会（委員長・安藤専哲。北海道仏教連合会会長）が結成され、道内58事業場の綿密な調査と遺骨の発掘・送還が行われた。また、各地に中国人殉難者の慰霊碑が建てられた。慰霊実行委員会は10団体によって組織されたが、札幌華僑総会、中国留日学生北海道同学会も参加した。

1953年7月15日には、札幌市東本願寺札幌別院で「第1回北海道関係合同慰霊大法要」を行い、北海道各地から収集され、札幌別院に一時安置された遺骨311体を慰霊した。法要には20団体、約600人が参加した。翌18日、400名によって奉持して札幌市内を行進の後、札幌駅から上京した。行進には札幌華僑総会の役員も参加した。

こうして収集された遺骨は1953年から58年まで、合計8回に分けて中国に送還された。送還された遺骨は2,849柱（内104柱は重複）であるが、日本での死亡者数は6,830名なので、まだ4,000名弱の遺骨が送還されないままである。遺骨の送還は在中国日本人居留民の引揚船の往路（空き船）を利用して行われたが、遺骨の捧持代表団には東京の中央慰霊実行委員会の代表だけでなく、遺骨が収集された地域の日本側代表や華僑総会の代表が参加した。北海道からの遺骨送還は1953年8月26日第2回355柱（回数は在中国日本人居留民の引揚船の回数を表している）、1954年11月16日第4回313柱、1955年12月6日第5回49柱、1956年8月21日第6回4柱、1957年5月17日第7回149柱であるが、北海道における死亡者数3,047名の28%にしかならない⁴。なお、捧持代表団として乗船した在日華僑総会代表の名簿には劉智渠（札幌華僑総会第2代会長）、李学士（第3代会長）

などの名前が挙がっている〔田中、内海、石 1987：406-514〕。

中国人殉難者の慰霊碑の一つとして、日本鉱業大江鉱山の殉難者 18 名の慰霊碑が後志の仁木町に建立されている。これは日本中国友好協会小樽支部と北海道支部連合会が中心となり、当時の仁木町長や町議会の協力を得て実現した。1966 年 10 月 29 日の除幕式には大谷瑩潤（中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会）も出席したほか、小樽仏教会 60 名を含む 250 名が参列した。これ以降、毎年 1 回、全道慰霊祭が挙行されるようになった。現在、仁木町霊園内の中国烈士園として整備されている。札幌華僑総会からは事務局長であった席占明が除幕式に出席したが、中国共産党と日本共産党が対立するようになったため、1968 年から 95 年まで参加していない。両党が和解したのを受けて、1996 年から再び参列するようになり、96 年からは駐札幌中国総領事館からも領事か首席領事が参列するようになった。また、1998 年 6 月 21 日の第 33 回慰霊祭には訴訟のため来日していた劉連仁も参列している。

殉難者の慰霊の歴史において、画期的な出来事が日中国交正常化の翌年 1973 年にあった。この年の 6 月 22 日、札幌中央区の自治会館で、北海道中国殉難烈士慰霊実行委員会主催の「中国殉難烈士慰霊祭」が開催された。会長の今井道雄は日本赤十字社北海道支部長（百貨店・今井の社長）だが、副会長は日中友好道民運動連絡会議事務局長と北海道建設業協会会長（伊藤組社長）の二人で、委員には県知事のほか、日本石炭協会北海道支部長、北海道鉱業会会長、北海道港運協会会長が名を連ねている。かつて強制連行者を働かせた業界団体の長たちである。それまでの慰霊祭が仏教協会、日中友好協会、日赤など中立か友好団体が中心であったのに対し、この時初めて強制連行者に対する責任を負うべき立場の人たちが殉難者への慰霊を行った。この慰霊祭には、北海道札幌華僑総会からは当時の会長・李学士をはじめとする総会役員や生き残った強制連行者も多数出席した。

2) 強制連行者の支援

劉智渠が強制連行者の面倒をよく見たことはすでに触れたが、彼が会長を務めた時期には大きな出来事が二つあった。1954 年の王松山事件と 1958 年の劉連仁事件である。

王松山事件～王松山（1923 年生、北京市出身）は中国二十九路軍の兵士だったが、内蒙古の包頭で日本軍の捕虜となり、北海道の夕張市北炭平和鉱真谷地炭鉱で労役に従事させられた。終戦後、10 月 30 日岩見沢市で中国人と朝鮮人との乱闘事件が発生し、鎮圧に来た日本の巡査を刺殺した容疑者としてアメリカ軍の MP に逮捕された。札幌での軍事裁判で終身刑を言い渡され、その後、1952 年 4 月サンフランシスコ講和条約発効で日本側に引き継がれ、同年 9 月札幌地裁で懲役 10 年の判決が出て、網走刑務所に服役していた。

彼のことを知った札幌華僑総会は調査、検討した結果、この裁判が日本の軍法会議ではなく一般司法裁判所で行われていること、平和回復後速やかに本国に送還すべきなのに拘束され続けていることなどが戦時国際法であるハーグ陸戦条約に違反していることを日赤を通じて日本政府に申し入れた。また、事件発生 の 4 日後に、MP が捕虜団代表に犯人の引き渡しを要求したのに対し、彼が指名されたという経緯があり、彼は無実の可能性が高い。事態はなかなか進展しなかったが、1954 年 10 月 4 日付で法務大臣の特別減刑があり、懲役 3 年 9 か月になり、しかも仮釈放の措置も加えられた。中国紅十字会代表団が訪日する所で、政治問題化するのを恐れた政府の措置と考えられている。

知らせを受けた札幌華僑総会はただちに網走刑務所に彼を迎えに行き、しばらく札幌に滞在した後は無事帰国した。

劉連仁事件～劉連仁（1913 年生、山東省高密市草泊村出身。2000 年他界）は 1944 年 9 月 28 日 31 歳のとき、自宅前から強制連行され、

11 月空知の明治鋳業株式会社昭和鋳業所で使役させられた。ここには 200 人が連れてこられた。過酷な労働に耐えられず、1945 年 7 月 30 日 5 人で逃亡したが、仲間は捉えられ、58 年 2 月 9 日当別町山中で発見されるまで、北海道で 13 年の間逃亡生活を送った。

新聞報道で知った札幌華僑総会では、さっそく劉智渠、張来栄（山東出身。空知の昭和電工豊里鋳業所で労役。逃亡経験あり）、席占明（山西出身。総会事務局長）など 5、6 人が札幌北署に保護されている劉連仁に面会に行った。席占明の「あなたは中国人ですか」という問いに対し、「うん」とうなずくだけであった。長年 1 人で生活していたため舌が固くなっており、後の言葉が出ない。警戒心を解くため、同郷で同じ体験をした張来栄が持ってきた餃子を勧めながら、自分の身の上を語った。みんな背広姿だったため、劉連仁は日本人と区別ができなかったようだ。

彼が中国のスパイだと一部の誤った報道がされるなか、この面会によって彼が中国人であることがわかり、華僑総会が身元引受人になった。そして、彼が帰国するまでの 2 か月間、席占明が彼の世話をした。2 月 10 日からエビス旅館で静養させ、席占明が毎日午後 5 時に仕事を終え、旅館に通い、戦争が終わったこと、中国が解放されたことなどを説明した。やがて言葉を少しずつ思い出すようになった劉連仁は、過ごした山々や人目を避けるために夜間に鉄道線路を歩いたときの情景を説明するようになった。読み書きはできなかったが、記憶力がよく、彼の説明に基づき席占明は「劉連仁さんの逃走経路図」を作成した。席占明は殉難した強制連行者の遺骨捜しや行方不明者の捜索の手伝いで、6 年間道内各地を歩いていたので、おおよそそれがどこか検討がついたという。また、使役された炭鋳名や一緒に逃亡した仲間の名前を手掛かりに、劉連仁と一緒に昭和鋳業に行き、名簿を見せてもらい、彼が間違いなく強制連行された劉連仁であることを検察で証明した。

3月25日、席占明、明治鉱業北海道支社の総務課長、赤十字道支部課長が付添い上京した。東京では明治鉱業の寮に劉連仁と席占明が泊まった。彼のことが大きく報道されるようになったので、国会でも野党議員が取り上げたが、政府は強制連行そのものを認めなかった。内閣官房長官からは手紙と10万円が届けられたが、日本政府の誠意のない態度を非難する声明を発表し（謝罪と補償を要求）、4月10日白山丸で帰国した。そして天津で妻や連行後に生まれた息子と会うことができた〔野添 1995：172-203、席 2001：176-183〕。

おわりに

本論を締めくくるにあたり、生存した強制連行者の帰国と殉難者の遺骨の収集、送還に尽力した残留中国人の残留理由、祖国や故郷への思いについて紹介したい。華僑総会5代目会長・席占明（北大留学組）については本人から、故人となった3代目会長・李学士（北大留学組）については遺族に話を伺うことができた。

席占明の場合、1950年学業を終えてすぐに日本人女性と結婚したこと、北海道における強制連行者への支援と殉難者の遺骨の収集、送還、慰霊に協力するよう要請されたことが残留する大きな要因になったといえる。両親が亡くなったとの知らせが届いても帰ることができず、初めて帰国したのは1970年であった。札幌華僑総会の事務局長として、北京の人民大会堂で開催される国慶節の祝賀会に参加するためであった。香港経由で中国に入ったが、故郷に戻ることは果たせなかった。翌71年、2回目に帰国した時は、10歳年下の二番目の妹が滞在していた北京のホテルに会いに来てくれたが、故郷の家には他人が住んでおり、兄弟たちも他所に転居してしまっている。そのため故郷には一度も戻っていない。このように故郷や家族との関係が薄れて、一度も帰郷していない残留者は少なくない。

席氏と蒙古高等学院、北大で同期だった李学士の場合、終戦後すぐ

にでも帰りたかったが帰れなかった。海には機雷が敷設されており、帰国する船がなかった。また、席氏と同様に、東京の陳焜旺から「自分だけ帰国して出世してどうする。強制連行者や日本で亡くなった人の遺骨の面倒をみなくてどうする」と説得され、日本にとどまることにした。若いころはよく海に行き、故郷のことを思っながらめていたという。

李学士は1967年から札幌華僑総会会長を務め、1972年日中国交正常化の年に、北京に招待された。その際、故郷に戻った。父親は学士が幼少のころに亡くなっていたが、母親は留学中の学士に知らせるなど言い残して亡くなっていた。学士が幼少の頃、流浪の占い師から「この子は遠くに行く。帰ってくると命が短くなるから、帰らないほうがよい」と言われたことがあり、学士が故郷を離れてからは、学士の身代わりのようにして同級生の男の子をかわいがったそうだ。残留した人それぞれに物語があるように、その人を見送った人や待ちわびた人それぞれにも物語があるということがおぼろげながら分かったような思いがした。

謝辞 本稿執筆にあたり、札幌在住の華僑やその家族の方から貴重なお話を伺うことができた。特に席占明氏からは貴重な資料を惜しみなく提供していただいた。お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

〔注〕

- ¹ 残留者に関しては、自伝や評伝という形で戦前、戦後をどのように生きてきたのかを知ることができる。たとえば、〔郭1984年〕、〔林1997〕、〔陳1993〕、〔山田2004〕などがある。しかし、これらは老華僑や戦後新たに「中国人」となった台湾人のものである。〔日本華僑華人研究会・陳2004〕は華僑や留學生の日本での活動には詳しいが、自ら残留することについてはあまり語っていない。特に強制連行者で戦後も日本に残留した人に関する資料は寡聞に

して知らない。

もちろん中国人強制連行に関する著書、資料は決して少なくはなく、筆者も参考にしている。しかし、従前のものは強制連行の全体像や個別の事案、生存者の帰国と遺骨送還、本人または遺族による訴訟などに関する内容であり〔田中、内海、石 1987〕、〔野添 1995〕、〔野添 1996〕、〔杉原 2002〕、残留した強制連行者に関するものは見当たらない。

- ² 秋田県の花岡鉦山の河川改修の土木工事に、華北労工協会の斡旋で中国人 986 名が従事した。収容されていた中山寮での生活や作業現場は生地獄で、栄養失調と過酷な労働、殴打、飢え、毎日のように病人、死者が続出した。一か八かで戦うことにしたが、手違いで予定通り行かず、1945 年 6 月 30 日夜半、急遽山に逃げるようになった。翌日から警察、憲兵、消防団が総動員体制で捜索し、逮捕された人たちは主犯を探すための拷問を受け、少なくとも 97 人以上の死者が出た。この事件による死者も含め、418 名が死亡している。

1950 年 9 月留日華僑総会が中心となって花岡事件処理委員会を組織し、調査団が現地で事件の本格的な調査、遺骨収集を行った。遺体を掘り出して火葬し、散乱していた遺骨を収集し、東京に持ち帰った。東京では 1950 年 11 月 1 日に浅草東本願寺で留日華僑総会主催の慰霊祭を開き、遺骨の大部分は 1953 年夏、黒潮丸で中国に送還された。なお、この追悼会に劉智渠は参列している〔日本華僑華人研究会・陳 2004: 340-345、田中、内海、石 1987: 401、405、中国人殉難者全道慰霊祭事務局 1961: 70〕。

- ³ 1967 年 2 月 28 日から同年 3 月 2 日にかけて、東京都文京区にある善隣学生会館（現在の日中友好会館）において、会館内に事務所を構えていた日本共産党系の日中友好協会と、事務所の撤収を要求する、中華人民共和国支持の寮生（華僑学生）やその支援者などとの間で発生した流血事件である。背景には、前年 2 月から 3 月にかけて起こった、国際政治路線をめぐる中国共産党と日本共産党との対立があった。最終的には 1969 年に日中友好協会側が会館から退去したが、両党の対立や善隣会館事件は、北海道における殉難者への慰霊活動にも少なからずの影響を与えた。

- ⁴ 日本政府は、遺骨送還は「日本赤十字の裁量」によって行い、「政府としては関知しない」という方針を取ったばかりでなく、帰国華僑の一人当たり持ち帰り荷物（上限 50 キロ）として遺骨を「帰還華僑に持たせる」とこととし、捧持団の旅費は政府は持たないという無責任で、非誠実な態度に終始した〔田中、内海、石 1987: 411〕。なお、1964 年までに送還された遺

骨のうち、860柱は遺族のもとに届けられたが、2340柱は引きとり手がなく、今も天津抗日殉難烈士記念館に安置されている。なお、2002年12月、東本願寺札幌別院の納骨堂に101柱の朝鮮人、中国人などの強制労働犠牲者の遺骨が置かれていることが公表され、続いて道内各地で遺骨が発見されたことを受けて、2003年からは「強制連行・強制労働犠牲者を考える北海道フォーラム」が結成され、韓国・朝鮮人、中国人の犠牲者をともに考え、遺骨返還を図ろうという運動が起こっている。

<参考文献>

王雪萍「留日学生の選択―〈愛国〉と〈歴史〉」劉傑・川島真編『1945年の歴史認識―〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』東京大学出版会 2009年

王雪萍「中華人民共和国初期の留学生・華僑帰国促進政策―中国の対日・対米二国間交渉過程分析を通じて」『中国21』Vol.33、2010年

回国五十年編輯委員会『回国五十年―建国初期回国旅日華僑留学生文集』北京、台海出版社 2003年

郭光甲『我童年の辛酸和壮年の掙扎 人生に怒涛のうねりを聞く』株式会社八仙閣 1984年

居之芬、庄建平『日本略奪華北強制勞工案史料集（上、下）』北京、社会科学文献出版社 2003年

許晨「北海道帝国大学の中国人留学生」『北海道大学大学文書館年報』5、2010年

謝培屏編『戦後遺送旅外華僑回国史料彙編 1』台北、国史館 2007年

杉原達『中国人強制連行』岩波新書 2002年

席占明「北海道での強制連行者との出会い―多くは祖国に帰れず他界―」(手記) 2000年8月15日

席占明「発見後の劉連仁と共にした二ヶ月」『憲法・平和主義を掘る―ベトナム戦争・コスタリカ・矢臼別』札幌土を掘る会 2001年

竹前栄治、中村隆英監修、松本邦彦解説・訳『GHQ日本占領史 第16巻 外国人取り扱い』日本図書センター、1996年

田中宏、内海愛子、石飛仁『資料 中国人強制連行』明石書店 1987年

田中宏、松沢哲成編『中国人強制連行資料：「外務省報告書」全五分冊ほか』現代書館 1995年

中国人殉難者全道慰霊祭事務局『戦時下における中国人強制連行の記録 付四万人の中国人強制連行の真相』中国人殉難者名簿共同作成実行委員会 1961

年

陳舜臣『青雲の軸』集英社文庫 1993 年（初版 1984 年）

永田英明「戦前期東北大学における留学生受入の展開—中国人学生を中心に」
『東北大学史料館紀要』1 号、2006 年

日本華僑華人研究会・陳焜旺主編『日本華僑・留学生運動史』日本僑報社
2004 年

野添憲治『中国人強制連行 劉連仁一穴のなかの戦後』三一書房 1995 年

野添憲治『花岡事件を追う：中国人強制連行の責任を問い直す』御茶の水書房
1996 年

日本中国友好協会北海道支部連合会編『知っていますか 北海道での中国人強制
連行—全道五十八事業場殉難の記録』日本中国友好協会北海道支部連合会
1989 年

武賢樹『桂和六十年史 1947（昭和 22）→2006（平成 18）』株式会社桂和商
事 2006 年

山田敬三「陳舜臣—国家・民族の枠を超える文学」神戸華僑華人研究会編『神
戸と華僑—この 150 年の歩み』神戸新聞総合出版センター 2004 年

林同春『橋を渡る人—華僑波瀾万丈私史』エピック 1997 年